

遠い記憶の中のかげら…。



manmamiya

## 太陽と月

---

誰もが自分の中に太陽と月を持っているだろう。わたしも同じ。太陽のように明るくおおらかな自分と、月のように静に一人で深くじっとしているだけの自分がある。時に闇は、心の中を支配する。

どちらが本物か…。誰にも分からない。自分にだって分からない。月明かりの中で闇に包まれ不安をつのるか、灯りを見つけ希望を感じるかは自分次第なのだろう。

人はそうやって、太陽と月の中をいったり来たりする。

## 不安の中からの脱出

---

もうすぐ三十歳の頃。女がこの歳までひとりでいれば、たくさんの恋愛も経験し、結婚も意識した人ともいなかったわけでもない。けれど現実には三十歳に一步手前で独身。心の中に重くのしかかる結婚と妊娠。どちらも心の中で望めば望むほど、どんどん遠のいていってしまうようなジレンマに陥っていた。

本気なのかな？

自分は結婚したいのかな？

子どもが欲しいだけなのかな？

親のため？

自分のため？

淋しいから？

不安だから？

なんとなく。毎日楽しいだけで過ごしたいような気分が続いていた。目の前に自分にぴったりのシンデレラの靴のように、ぴったりの男性が現れることを夢見て…。毎日、毎日、毎日。グルグルグルグル。

気が付くと、大きな岩が自分のことを押しつぶしてしまうような重圧感から抜け出す方法を探していた。

## 遠い記憶との出会い

---

だれでも持つ脱出願望。わたしの中で沸騰寸前のところに、目の前に光を放つ本を発見した。その表紙には深く刻まれた人の顔が描かれていた。

「今日は死ぬのにもってこいの日」ナンシー・ウッド著

光り輝くその本を手にとって、心の音で読み、心の目で視ているうちに、身体の中で何か得体の知れないものが騒がしく踊りだすのを感じた。ひとつひとつの言葉が、とても暖かく懐かしくて、わたしの心を淡い光で包み込んでくれた。それは、まるで自分の遠い先祖の言葉のように、心の中に灯りを点してくれた。この本を開く度に、心は満たされ暖かくなった。

それは、自分の中の誰かが目を覚ました瞬間だった。

自然とは遠いところで、動くことなく静かに月の時間を浪費しているだけの自分に気が付いた。芭蕉のようにそぞろ神に憑かれ気持ちが落ち着かなくなり、太陽が照りつける大地に向って旅をすることにした。アメリカ大陸。ネイティブアメリカンたちの故郷、聖なる大地へと。

## 近づいた自然界

---

光が私にこの本を導いてくれたように、私が旅をするための準備はすでに存在していた。濡れた大地を横断し、テントの中で夜を過ごした。

聖なる大地はわたしを浄化するために、大雨とサンダーバード（雷）で歓迎してくれた。テントに当たる大粒の雨音。大地を揺るがすほどの大きな音で鳴り響く雷。どれもはじめて体験することなのに、何処か落ち着きを払った自分がそこにいた。今まで心惑わし支配していた退屈は自然界では存在しなかった。

「今日は死ぬのにもってこいの日」そんなことを感じ考えたこともなかった少し前の自分が遠い過去のものになった。それは、脱皮した抜け殻のようだった。

結婚で焦ることもないし。

子どもを産む適齢期を考えて悩みも消え。

グルグルグルグル...

頭の中をいつも支配していたよからぬことが消えた。厄介なことが頭の中から消えると、自分の中が身軽になり、頭の中がクリアになった。

自然界の中に入ると、自分がこの宇宙と大地と空と星と木々と花々と昆虫と動物たちと、なんら変わりなく繋がっていることを強く感じた。自然界の法則を感じる事が出来た。それは、わたしの人生の中で頭の中では分かっていたつもりだったけれど、本当に身体の奥から強く感じる事が出来た素晴らしい体験だった。

本屋で見つけた光り輝く一冊の本が、私を導き一つ上のステージへと誘ってくれた。なんて私は幸福ものなのでしょう。いつか、光り輝く本を見つけて次のステージへと登ってみたいものです。

いつか...

近いうちに...

love & kiss & hugs !



記憶の中のかげら...

<http://p.booklog.jp/book/47072>

著者 : manmamiya

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/manmamiya/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/47072>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/47072>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.